

令和 4 年 5 月 30 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02796

研究課題名（和文）音楽科新人教師育成プログラムの開発：経験年数の異なる教師の実践知の比較を通して

研究課題名（英文）Development of novice teacher training program in the music department :
Comparison of practical knowledge of teachers with different years of experience

研究代表者

高見 仁志 (TAKAMI, Hitoshi)

佛教大学・教育学部・教授

研究者番号：40413439

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：音楽科授業を行う一人の新人教師から「即時の知」と「信念・価値観としての知」を包括的に抽出し二つの知の相互作用を切り口として、音楽科における新人教師教育への提言を試みた。また、PCKは教師の実践知であるとの立場から、その構造モデルを提示した。これらを基盤として、音楽科授業を行う新人教師の実践知分析をPCKの観点から実施し、音楽科新人教師育成プログラム開発に向けた指針を提示した。実践知解明に関して、「実践の省察において意味づけ可能な次元」と、「実践の中でしか具現化し得ない次元」の両者を視野に入れ、方法論の検討を行った。多数の解明法の中でも、再生刺激法およびオン・ゴーイング法の可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音楽科では先行例のなかった、教師の「実践知（practical knowledge）」研究に基づく新人教師教育プログラム開発の基盤を築くことができた。「即時の知」と「信念・価値観としての知」を包括的に抽出し二つの知の相互作用を切り口として、音楽科における新人教師教育への提言を試みたことも、学術的意義と捉えられよう。さらには、PCK理論の視座からも音楽科新人教師育成プログラムを検討した点や、実践知抽出の方法論の再考を試みた点において、本研究は独自性や意義が認められるものと考えている。今後は、新人教師の授業省察力向上を目指したプログラム開発へと発展させることが希求されている。

研究成果の概要（英文）：Comprehensively extracting "immediate knowledge" and "knowledge as beliefs / values" from one new teacher who conducts music lessons, and using the interaction of the two knowledge as a starting point, recommendations for new teacher education in the music department I tried. In addition, PCK presented its structural model from the standpoint of being a teacher's practical knowledge. Based on these, we conducted a practical knowledge analysis of new teachers who conduct music lessons from the perspective of PCK. He presented guidelines for developing a new teacher training program. Regarding the elucidation of practical knowledge, we examined the methodology with a view to both "dimensions that can be meaningful in the reflection of practice" and "dimensions that can only be realized in practice". Among the many elucidation methods, the possibility of stimulated recall method and on-going method was suggested.

研究分野：教科教育学

キーワード：実践知 新人教師育成 音楽科授業 PCK 即時の知 信念・価値観としての知

1. 研究開始当初の背景

申請者のこれまでの研究は、大きく二つの柱で構成された。一つ目の柱は、音楽科授業における教師の実践知に包含される「即時の知」(図1)の解明である。D.Schön(1983)の提唱する「反省的実践家(reflective practitioner)」理論に基づいて、音楽科授業における教師の即時的な思考の構造を「状況把握・判断・選択」として提示し、それを新人教師と優秀さを認められた熟練教師の間で比較した。この研究では、音楽科授業中の教師の「即時の知」が類型化され、優れた熟練教師の力量が導出された。二つ目の柱は「信念・価値観としての知」(図1)の解明である。申請者は、教師のライフステージの構造を示し、ライフヒストリー法(I.Goodson & P.Sikes,2001)を用いて、音楽科における熟練教師の「信念・価値観としての知」を究明した(高見,2011)。この研究は、新人教師が音楽科授業で遭遇する困難やそれを克服するための方略研究に関連づけられた。

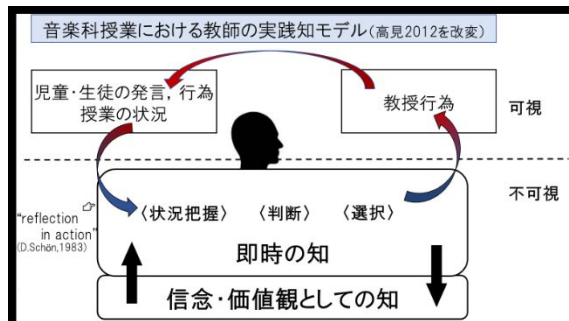


図1 (音楽科授業における教師の実践知モデル)

上記の申請者の研究は、新人教師育成プログラムを標榜した学術論文や著書(例:高見,2014,2016,高見 他,2018)に結実したが、未解決の課題を残した。それは、「即時の知」と「信念・価値観としての知」が、それぞれ別の被験者から個別に抽出されており、同一教師を対象とした包括的な解明がなされていない点である。また、「即時の知」はスキル実行の知、「信念・価値観としての知」は問題状況の本質や原理に關与する知、と捉えているが、その相互作用に関しては未だ明らかにできていない。二つの知の包括性と相互作用の解明を基盤とした、音楽科新人教師育成プログラムの開発が希求された。

2. 研究の目的

本研究は、音楽科授業における教師の実践知である「即時の知」と「信念・価値観としての知」を包括的に同一被験者から抽出し、下記の3点に取り組むことが目的である。計画段階では予想もなかった未曾有のコロナ禍に見舞われ、熟練教師の実践知抽出の予定を変更し、新人教師だけを被験者とせざるを得なかった。

音楽科授業における新人教師の実践知を再生刺激法(stimulated recall method)を用いて顕在化する。

「即時の知」と「信念・価値観としての知」の相互作用を解明し、実践知の重層構造の観点から、新人教師と熟練教師の音楽科授業中の認知と行為の特徴を解明する。

上記により得られた新人教師の実践知の特徴を基盤として、PCK理論の視点を切り口としながら音楽科新人教師育成プログラム開発への応用を試みる。

3. 研究の方法

先行研究を詳解することで、実践知の構造モデルを示し、PCK理論の解釈も併せて行い、研究の方法論上の方向性を導く。

音楽科授業を行う新人教師の実践知を、以下の方法で抽出する。

<調査と分析の手続き>

調査対象者の実践知に関して、「再生刺激法(stimulated recall method)」を採用して調査を進めた。手続きは以下の通りである。

1) 調査対象者が行う音楽科授業を2台のカメラで録画する。主となる1台は移動可能として、授業者と学習者の相互作用の様子を撮影する。他の1台は、予備的に教室後方に固定し授業全体を撮影する。

2) 授業後、可能な限り早い段階で(今回は授業終了から2時間30分経過後)調査対象者に録画した映像を見せる。調査対象者は、主となる移動カメラの映像で詳細を追いつつ、必要に応じて固定カメラの映像でも予備的に全体を確認する。授業再生中、調査対象者が以下の場面だと感じたところで映像を一時停止する。

) 授業しながら自分が活発に思考をしていると意識していた場面(「その瞬間に何かをひらめいた場面」「こうしようという思いが強かった場面」「どうしようか迷ったあげくの教授行為をとった場面」等)

) 振り返った時に初めて、無意識な指導をしていることに気づいた場面

3) 上記) では調査対象者がどのような思考をめぐるせていたのか、) では、どのような思考をめぐるせていたと推測できるか、について可能な限り詳しい発話を求める。また、なぜそ

のような思考が生まれてくるのかについても半構造化面接を行う。この面接の状況は、一時停止させている授業映像とそれを見ながら応える調査対象者の発話が、シンクロするよう撮影される。

4) 上記 3) の調査対象者の発話データを全て文字化するとともに、授業の一時停止場面の詳細も記録する。

5) 文字化されたデータを集約し、その意味内容を読み解く質的分析を行う。その際、発話だけを手がかりとするのではなく授業場面の詳細も映像で確認しその文脈に即して多面的な検討を行う。分析の観点は、前述した実践知の定義、特徴、モデルから導出された以下の4点とする。

- ・実践知の稼働が意識的か無意識的か
- ・即時の知と信念・価値観としての知の稼働と概要
- ・状況との対話に関して
- ・即時の知と信念・価値観としての知の相互作用（外在化と内在化）に関して

無意識の実践知に関しては、本人の推測した発話に基づくが、発話がない箇所に関しては、映像分析や授業の文脈に基づき筆者が推測する。調査結果や考察において発話の例を記載する場合、上記4)に示した記録を可能な限り忠実に提示する。ただし、その発話文単独では分かりにくい場合、括弧内に補足説明を加えた。

上記 および を基盤として、音楽科新人教師育成プログラムへの提言を行う。

4. 研究成果

(1) 教師の実践知モデル

教師の実践知を、「個別具体的な状況で発揮され、更新される実践者独自の知識や思考様式、方略の総体」(砂上ら 2015, pp.8-9)として定義した。またその特徴として、以下の4点(楠見 2012, pp.11-12)を確認しておきたい。

- 個人の実践経験によって獲得されること
- 実践において目標指向的であること
- 実践の手順や手続きに関わること
- 実践場面で役立つこと

こうした定義と特徴に併せて楠見(2012, p.12)の解釈を援用し、授業を行う教師の実践知モデルを図1のように設定した。実践知を二層から構成されるものとして捉え、それぞれを「即時の知」と「信念・価値観としての知」として位置づけた。

即時の知とは、活動の中で実践者が目的遂行や問題解決のために状況と対話(conversation with the situation)して稼働させる、いわばスキル実行の知である。この知は、ドナルド・シヨン(Donald Schön)の「行為の中の省察(reflection in action)」理論を基に「状況把握」「判断」「選択(教授行為の選択)」で構成されるとした。

信念・価値観としての知とは、問題状況の本質や原理に関与する知である。即時の知が稼働するプロセスに影響を与え方向づけるといった外在化を伴っている。またこの知は、即時の知が内在化することや、その他の様々な経験によって形成される。このように二つの知は、相互に関与しながら往還し、適宜更新されると考えられる。

(2) PCK 理論

教員養成の世界では「教科に関する科目(いわゆる教科専門)」と「教職に関する科目(各教科の指導法)」の不協和という構図が以前より問題視されてきた。しかしながら、文科省等の提言により「学問的知識と臨床経験を統合」(八田 2008, p.181)させる意義を再認識する動きが散見できるようになってきた。例えば、佐藤(2015, p.67)は、リー・ショーマン(Lee Shulman)が提唱した「Pedagogical Content Knowledge(以下 PCK と略す)」を「授業と学びに翻案した教科内容の知識」と訳し、「教師の専門職性の中核をなすもの」として定位されると捉えた。また佐藤は、PCK に関して次のように解釈している。

「教師が保有している教育内容の知識(content knowledge)を、生徒の能力や背景の多様性に応じて教育的に(pedagogically)強力で適切なかたちへと変容する」教師の能力(佐藤 1996, p.149)。

佐藤の見解から PCK とは、教科専門と教科の指導法の統合・往還を基盤とした、教師にとって枢要な力量であることが導かれよう。この考え方はまさに中教審第 184 号の主張と符合し、現在我が国で進められている教師教育改革の根幹をなす理論の一つと捉えることができる。本研究では、この論を視座とした新人教師教育の方向性を模索することとした。併せて、前述した坂本や秋田による「PCK とは教師の実践知である」という論にも着目した。PCK を教師の実践知と捉えてその構造を示すため、上記の佐藤や楠見(2012)の考え方を融合させて教師の実践知モデルを構築した(図1参照)。

(3) 新人教師の実践知の特徴

調査対象者の実践知の特徴は6種にカテゴライズされ、それぞれ以下の通りであった。

- a) 状況と対話しながら、明確な外在化・内在化を伴い、適切な実践知が意識下で稼働している。
- b) 内在化が不明以外は、a)と同じ特徴である。
- c) 準備された教授行為をとったため状況との対話は顕著ではないが、授業冒頭で問題はない。

それ以外は、b)と同じ特徴である。

- d)状況と対話しながら、明確な外在化・内在化を伴い、適切な実践知が無意識下で稼働している。
- e)外在化は伴うがその場での状況との対話が成立していない。このような実践知が無意識下で稼働している。
- f)矛盾する外在化が生起し、状況との対話が成立していない。このような実践知が無意識下で稼働している。

以上の結果から、調査対象者は教職2年目ながらも、状況との対話を伴う適切な実践知を稼働させている場面が多かった。また、それを振り返りによって言語化できている点も評価できるだろう。その一方で、さらに成長するための課題も散見される。それは「状況との対話が成立していない場面があること」、「矛盾した外在化が見られる場面があること」である。

(4) 音楽科新人教師育成への提言

1) 児童と教師の相互作用の省察

ショーンは、「互いの演奏を聴き、自分の演奏を聴いて、音楽がどこに向かっているかを『感じ』、それに自身の演奏を合わせていくのである」(2017, p.45)と述べている。ショーンの言う「音楽がどこに向かっているかを『感じ』」することは、児童と教師の相互作用を通じて授業が開く音楽科において、生命線とも言うべきことであろう。

2) 自身の教授行為の省察

調査対象者は、自身の教授行為に対しても状況と対話できていなかった。このような状態を回避するには、映像の振り返り時に、自身の教授行為を注視させ、児童だけでなく自らが出している音にも鋭敏になれるようなメンタリングが不可欠である。自己の教授行為との対話を、実践中に生起させるような支援が必要となる。「音楽に対する“感じ”」(ショーン 2001, p.90)といった直感を基盤に、自身の教授行為をその場でメタ認知できるようになるまで、自らの発する音楽(音)やパフォーマンスを省察し続けることが重要となる。

3) 音楽科特有の実践知を視野に入れる

音楽科特有の実践知を視野に入れたメンタリング、あるいは自己リフレクションも重要となる。そのためには次の2点に留意しながら、事後研修のあり方を模索する必要がある。1点目は、「音楽科では、音楽(音)というその場で雲散霧消する素材を扱うため、極めて瞬間的に実践知を稼働させねばならないこと」である。今、現れた音楽(音)を、後戻りして確認する等の、試行錯誤が容易ではないのである。2点目は、「瞬間的に生成する音楽(音)の流れを感じながら、併せて同時に授業を進めることが教師に求められること」である。こうした瞬間的、即興的に生起する現象に対しては、録画、録音等の方法で何度もリフレクションし、力量形成を図る必要がある。これら2点に加えて特別に留意したいのは、「音楽科授業では児童・生徒と教師の間に『相互作用』の生起する頻度が高い」という点である。

4) 新しい養成教育カリキュラムの開発

新人教師の力量形成には、採用されてからの研修だけでなく養成期の教育も大きく関与している。この観点から新人教師教育を論考することは重要である。とりわけ、PCK理論に関連する新たな教員養成カリキュラムの開発は、ここまでの提言に併せて、新人教師教育の下支えとなり得る。

こうした考えに即した一例として、鳴門教育大学(2006, pp.16-17)の「教科専門と教科教育とが交わる場所に構想され」た「教科内容学」に関する取り組みがあげられる。新井知生(2015, p.28)は、教科内容学研究の代表的なプロジェクトとして、兵庫教育大学・鳴門教育大学・東京学芸大学・上越教育大学・岡山大学の取り組みをあげる。また、広島大学・島根大学などでも、独自の研究が行われているとしている。

音楽科におけるPCKを標榜したカリキュラム開発としては、上記の教科内容学研究を進めている大学の音楽担当教員の手によるものが確認できる。例えば、鳴門教育大学では、教科内容学研究を理論構築の範疇にとどめることなく、教育実践を前提としたテキストの作成にまで発展させている。これをさらに前進させる策として、三村(2013, pp.75-76)は、教職と教科を架橋する音楽科教員養成カリキュラム構想の中で、「それぞれの内容が獲得されたうえで、架橋する科目を設定するべきであろう」と述べている。

三村の指摘からも分かるように、教科専門の能力を教科指導へ翻案可能とするカリキュラムが、新人教師教育を支える柱となることは言うまでもない。すなわち、教科専門と教科の指導法を統合させ、常に教育現場の音楽科授業を意識した教員養成カリキュラムの開発と実践こそが、新人教師の力量形成を企図した礎となり得る。

【引用・参考文献】

- Lee S. Shulman (1987) Knowledge and Teaching: Foundations of the New Reform, *Harvard Educational Review*, 57 (1) pp.1-22.
- D.ショーン(2001)『専門家の知恵 反省的实践家は行為しながら考える』佐藤学・秋田喜代美訳、ゆみる出版。[Schön, D. (1983) “*The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action.*”]
- D.ショーン(2017)『省察的实践者の教育 プロフェッショナル・スクールの実践と理論』柳沢昌一・村田晶子訳、鳳書房。Schön, D. (1987) “*Educating the Reflective Practitioner:*

Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions.”

- 新井知生(2015)「『教科内容学』研究の成果と課題 教員養成カリキュラムにおける教科専門の授業の在り方を中心に」島根大学教育学部紀要, 第49巻.
- 楠見孝(2012)「実践知と熟達者とは」金井壽宏・楠見孝 編『実践知: エキスパートの知性』有斐閣.
- 坂本篤史・秋田喜代美(2012)「教師」金井壽宏・楠見孝 編『実践知: エキスパートの知性』有斐閣.
- 佐藤 学(1996)『教育方法学』岩波書店.
- 佐藤 学(2015)『専門家として教師を育てる 教師教育改革のグランドデザイン』岩波書店.
- 砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・中坪史典・安見克夫(2015)「幼稚園4歳児クラスの子供における保育者の実践知 時期の異なる映像記録に対する保育者の語りの分析」『日本家政学会誌』66, 1号, pp. 8-18.
- 高見仁志(2014)『音楽科における教師の力量形成』ミネルヴァ書房.
- 高見仁志(2019)「音楽科における新人教師教育への提言 新人教師の実践知解明を手がかりとして」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.17, pp.6-15.
- 鳴門教育大学コア・カリ開発研究会(2006)『教育実践学を中核とする教員養成コア・カリキュラム 鳴門プラン』暁教育図書.
- 八田幸恵(2008)「リー・ショーマンのPCK概念に関する一考察 『教育学的推論と活動モデル』に依拠した改革プロジェクトの展開を通して」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第54号.
- 三村真弓(2013)「音楽科教員養成における教職と教科を架橋する構成原理を求めて」『日本教科教育学会誌』第35巻, 第4号.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高見仁志	4. 巻 51-2
2. 論文標題 新時代の学校音楽教育 音楽科教育の意義の再定義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 音楽教育学	6. 最初と最後の頁 78 - 79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高見仁志	4. 巻 45
2. 論文標題 音楽科授業成立の鍵 教育的瞬間と教師の実践知に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西教育年報	6. 最初と最後の頁 156 - 160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高見仁志	4. 巻 44
2. 論文標題 音楽科教員養成における「教師の実践知研究」の意義 リー・ショーマンのPCK理論に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西教育年報 (関西教育学会)	6. 最初と最後の頁 76 - 80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高見仁志, 齊藤 忠彦, 津田 正之, 菅 裕, 伊野 義博	4. 巻 50
2. 論文標題 予測困難な時代と音楽教育 新型コロナウイルス感染症の影響下において	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽教育学 (日本音楽教育学会)	6. 最初と最後の頁 45 - 52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高見仁志	4. 巻 20
2. 論文標題 PCK理論に基づく音楽科新人教師教育への提言 音楽科授業を行う新人教師の実践知分析を手がかりとして	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学部学会紀要（佛教大学教育学部学会）	6. 最初と最後の頁 55-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高見仁志, 臼井奈緒	4. 巻 16
2. 論文標題 日本の音楽科教科書にみる絵譜の絵画性 - 幼児教育への応用を展望して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽学習研究（音楽学習学会）	6. 最初と最後の頁 47-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高見仁志	4. 巻 17
2. 論文標題 音楽科における新人教師教育への提言 新人教師の実践知解明を手がかりとして	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音楽教育実践ジャーナル（日本音楽教育学会）	6. 最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高見仁志	4. 巻 43
2. 論文標題 音楽科授業における教師の実践知をいかにして解明するか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西教育年報（関西教育学会）	6. 最初と最後の頁 111-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高見仁志	4. 巻 28
2. 論文標題 PCK理論を基盤とした音楽科新人教師の実践知解明からの提言 Proposal from elucidation of novice music teacher's practical knowledge based on PCK theory	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教師学学会第21回大会論文集	6. 最初と最後の頁 28-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高見仁志, 齊藤 忠彦, 津田 正之, 菅 裕	4. 巻 49
2. 論文標題 新時代の学校音楽教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音楽教育学 (日本音楽教育学会)	6. 最初と最後の頁 55-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 A Study on Practical knowledge of Novice Teachers performing Music Classes
3. 学会等名 JUSTEC Conference2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高見仁志 菅 裕 他
2. 発表標題 新時代の学校音楽教育 音楽科教育の意義の再定義
3. 学会等名 第52回 日本音楽教育学会全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 コロナ禍において音楽科教師の実践知は変容するか
3. 学会等名 第18回 日本質的心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科における教師の「信念・価値観としての知」はコロナ禍によって再構成されるのか 教師のライフヒストリー研究を援用して
3. 学会等名 第73回 関西教育学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高見仁志 臼井奈緒
2. 発表標題 教員・保育者養成課程における絵譜の作成による 学修プロセスの研究 学生の意識の変容に着目して
3. 学会等名 第17回 音楽学習学会全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科教師の実践知の構造と解明法の検討
3. 学会等名 第23回 日本教師学学会全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高見仁志, 齊藤 忠彦, 津田 正之, 菅 裕, 伊野 義博
2. 発表標題 学会長諮問に基づく緊急プロジェクト研究 予測困難な時代と音楽教育 新型コロナウイルス感染症の影響下において
3. 学会等名 第51回 日本音楽教育学会全国大会 (Web開催) (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 PCKを視座とした音楽科教師の実践知分析
3. 学会等名 第17回 日本質的心理学会全国大会 (Web開催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科授業成立の鍵 教育的瞬間と教師の実践知に着目して
3. 学会等名 第72回 関西教育学会大会 (Web開催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科新人教師の実践知をPCK理論から解明する
3. 学会等名 第22回 日本教師学学会全国大会 (Web開催)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高見仁志, 白井奈緒
2. 発表標題 教材としての絵譜 - 日本の音楽科教科書にみる絵譜の絵画性 -
3. 学会等名 第16回 音楽学習学会全国大会 (Web開催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 PCK理論を基盤とした音楽科新人教師の実践知解明からの提言 Proposal from elucidation of novice music teacher's practical knowledge based on PCK theory
3. 学会等名 第21回 日本教師学学会全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科教員養成における『教師の実践知研究』の意義 リー・ショーマンの PCK 理論に着目して
3. 学会等名 第71回 関西教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高見仁志, 齊藤 忠彦, 津田 正之, 菅 裕
2. 発表標題 新時代の学校音楽教育
3. 学会等名 第50回 日本音楽教育学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科授業を行う新人教師の実践知 A教諭の実践知分析を手がかりとした新人教師教育への提言
3. 学会等名 第50回 日本音楽教育学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科授業における教師の実践知 構造分析と研究の展望
3. 学会等名 第16回日本質的心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高見仁志
2. 発表標題 音楽科授業で稼働する教師の実践知分析 - 新人教師のリフレクションを手がかりとして -
3. 学会等名 第15回 音楽学習学会全国大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 高見仁志, 齋藤 忠彦, 菅 裕 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育芸術社	5. 総ページ数 253
3. 書名 新版 中学校・高等学校教員養成課程音楽科教育法	

1. 著者名 日本音楽教育学会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 247
3. 書名 音楽教育研究ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------